

一第100編一 沖繩の遺産

那覇に行けば多くの人が足を向けるだろう。毎年台風の災害に見舞われ続けてきた沖繩の風土が生んだ住宅建築の至宝^{*1}である。現在見ることでできる屋敷は、周囲をフクギの生垣と頑強な石垣で囲まれ、その内部に風水の配置に従って、①主屋（ウフヤ：母屋＋トウングワ：台所）②アサギ（離れ座敷）③高倉（籾倉）④フル（豚小屋兼便所）⑤メーヌヤ（前の屋：家畜小屋兼納屋）⑥ヒンブン（入り口に正対する目隠し塀）⑦カー（井戸）等の建築要素で構成されている。

赤い丸瓦の屋根の上には魔除けのシーサーが鎮座し、重量のある瓦は強風対策として白い漆喰が隙間に塗りこめられ、瓦同士は互いにしっかりと固められている。そのコントラストが美しい。また、屋根は強い日差しと雨を避けるために軒が深く、その部分をアマハジ（雨端）という。屋根が土庇の



写真100-1 門とヒンブン



写真100-2 アマハジ

*1
中村家住宅：沖繩県中頭郡北中城村にある民家、国の重要文化財

文章量の調整が必要です

ように出張った構造である。

沖繩の伝統的な家屋では、中国の影響を強く受け風水が重要視された。首里城とその城下もまた、四神相應の理想型を追求した配置が踏襲されている。かつては、家を建てる際に風水の専門家であるフンシミー（風水見）に良い方角・地形を見定めさせた。日が昇る東（アガリ）が良い方角であり、西（イリ）は悪いとされた。また、前方が低く後方が高く傾斜している地形が良いとされ、かつ前方（門に当たる部分）が南に向いていることが良いとされた。従って、南東が最良の部屋割り位置であり、逆に北西が最も悪い位置となる。中村家住宅もまさにこの配置に従い、アサギや一番座（客間）が南東に、フル（豚小屋兼便所）が北西に配されている。

資料によれば、主屋は18世紀中頃の建築とされ、鎌倉・室町時代の日本の建築様式を取り入れながら、随所に独自の手法が加えられている。また、木材にはイヌマキやモッコクが使用されているが、これらの樹種は高級木材の類で、当時一般の使用は禁じられていたという。気候風土は住まいの文化、そして家をつくる。そこで長い時間をかけて編み出された住まいやまちの配置や構法は、風、水、そして土という要素と呼応し、共生し、そこにしかない心地よく美しい居住環境を生み出したのであった。



写真100-3 アサギ



写真100-4 ニワと高倉